

岩木山刊行会編

「岩木山」―岩木山麓古代

遺跡発掘調査報告書―

井上 久

一

昭和三十三年から三年計画で、弘前市教育委員会が中心となって、岩木山麓の遺跡調査を行うことになったという風聞を耳にし、うらやましいなという気持ちと後始末が大変だろうなという気持ちとが交錯していたのが、つい数日前のように思い出されるが、あれからもう十余年の歳月が流れているのだ。

昭和三十三年には、筆者は青森市立中央高校に勤務中で、夏季休暇の大部分を司書教諭の講習会出席のために秋田大学学芸学部で過ごし、研から始められた秋田城址の発掘調査を見学させてもらった。三十四・五の両年は慶応義塾大学文学部の清水潤三先生と、青森市三内遺跡の第三・四次発掘調査に取組んでいる。岩木山麓の調査は、大森勝山遺跡の關係で、一年延長されることになったのだが、この昭和三十六年からは青森市教育委員会でも発掘調査を行うことになり、小野忠明・青倉孝八氏と筆者とで、青森市三内並園遺跡の調査を行って

いる。

このように少々多忙だったためか、岩木山麓の遺跡調査には、一度も現場見学すらしていない。右ろんその氣にさせられ、調査現場へ顔を出す機会は作れたはずだったのに、生来怠惰な筆者はそれをしなかつたのだ。また、その後数回にわたり岩木山麓をドライブすることはない。有名な大森勝山の大堅穴所在地すらまだ实地踏査していない。報告書に記載されている各遺跡は、みな身近かな所にあるので、実査の上でペンを執ればこの上もなかつたのだが、それすらできなかった。

そのうちに弘前市教育委員会からは、この発掘調査に關する年表列の概報が刊行されはじめた。また、成田末五郎、羽越潔両先生の手によって、日本考古学年報に代表的と思われる遺跡の概略が報じられるようになり、本報の発刊が待たれるようになった。やがて「岩木山刊行会」という団体から報告書が出版されることになり、県内主要書店を通じて購読者の予約募集がはじまった。本書印刷中に印刷元の弘前市小野印刷所が火災で全焼し、発刊がかなり遅れるという事件があったりしていたが、この時は筆者は何故か予約していない。

たまたま昭和四十三年の秋、勤務していた青森市立第一高校に出入していた書店が、予約者が現物を見て、あまりに専門的で難し過ぎるといって購入を拒否され、現物をかかえて困っている本があるが先生なら買ってく

ださるでしょうといつて持つて来たのが、この「岩木山」であつた。このような誤で、思いがけず予約特価で手に入つた次第である。予約限定の非売品であつたために、本書は予約年度や予約先によつて、売価が種々にわかれていたようである。

二

さて内容であるが、なにぶんにも本文五二五ページ・插图二〇〇図（内折込二図）・写真図版一ニ三ページ・カラー写真一葉という膨大なものなので、到底いちいちの詳細な批評はできかねる。とりあえず各章・節ごとの項目と執筆者名とを列挙するだけでも次のようになる。

- 第一章 発掘調査の契機（成田末五郎）
- 第二章 発掘調査の経過
 - 第一節 予備調査（成田末五郎）
 - 第二節 昭和三十三年度の調査（村越潔）
 - 第三節 昭和三十四年度の調査（戸沢武）
 - 第四節 昭和三十五年度の調査（成田末五郎）
 - 第五節 昭和三十六年度の調査（村越潔）
- 第三章 岩木山麓の地学的考察（酒井軍治郎）
- 第四章 調査した遺跡と出土遺物
 - 第一節 湯ノ沢遺跡（村越潔）
 - 第二節 茶師I号遺跡（村越潔）
 - 第三節 茶師II号遺跡（田村誠一）

- 第四節 一本木沢遺跡（田村誠一）
- 第五節 常盛野遺跡（渡辺兼庸）
- 第六節 西南麓地区各遺跡（成田末五郎）
 - 1、九十九森
 - 2、マンサ森およびその附近
 - 3、黒森山附近
 - a、黒森山
 - b、枯木平、瑞穂開拓
 - c、カラサ館
- 第七節 寺沢遺跡（渡辺兼庸）
- 第八節 岩木山神社元宮址（成田末五郎）
- 第九節 小森山東部遺跡（今井富士雄）
- 第十節 小森山西部遺跡（村越潔）
- 第十一節 西岩木地区各遺跡（成田末五郎）
 - 1、苗代沢
 - 2、景光院林・永平寺平
 - 3、大野平
 - 4、鉄沢
- 第十二節 前森遺跡（村越潔）
- 第十三節 尾上山遺跡（渡辺兼庸）
- 第十四節 黄金山遺跡（渡辺兼庸）
- 第十五節 大森勝山遺跡
 - 1、遺跡の発見と位置
 - 2、第一次調査の発掘経過

3、竪穴住居址

4、出土遺物

5、考察（ノリノ村越塚）

6、第二次調査の発掘経過（渡辺兼晴）

7、環状列石の発見（田村誠一）

8、環状列石の下部調査（村越潔）

9、環状列石の内部の調査（田村誠一）

10、環状列石の外周部の調査（磯崎正彦）

第十六節 十腰内遺跡（今井富士雄・磯崎正彦）

第十七節 藏寇山神社元宮址（成田末五郎）

第十八節 浮橋貝塚（村越潔）

第十九節 外馬屋遺跡（村越潔）

第二十節 若山遺跡（村越潔）

第二十一節 大曲工号遺跡（田村誠一）

第二十二節 大曲Ⅱ号遺跡（田村誠一）

第二十三節 大曲Ⅲ号遺跡（田村誠一）

第二十四節 大曲Ⅳ号遺跡（小山連一）

第二十五節 大平野工号遺跡（田村誠一）

第二十六節 大平野Ⅱ号遺跡（田村誠一）

第二十七節 大平野Ⅲ号遺跡（小山連一）

第二十八節 大館山遺跡（斎藤忠・岩崎卓也）

第二十九節 大館森山製鉄炉遺構（成田末五郎・小山連一）

第三十節 大館森山・大平野両製鉄址について（戸

沢武）

第五章 総括（八幡一郎）

三

このように充実した内容なので、先述の通りいちいちの批評はできかねるが、幾のついた点を順を追って述べてみたい。

第二章第一節の「予備調査は、下に「と実施経過」とつけ加えた標題にした方がわかりやすいと思われる。この節では、若い頃から植物学にご造詣が深かった成田末五郎先生の「生物学約景観と遺跡」が興味深かった。また、十五ページから発掘作業一覽が出てくるが、この表から昭和三十三年から三十五年までは補助員であった田村誠一氏が、三十六年には発掘担当者になり、考古学徒として立派に成長して行れた姿がうかがえる。第二節から第四節までは、各年度の調査概要が要領よくまとめられている。

第三章は考古学にとつて大切なことでありながら、よく見逃され易い地学的考察で遺跡が地学的に見てどのような地点に位置することが多いのかという、立地条件を知る上にきわめて参考になる。

第四章は調査報告の本論ともいうべきもので、三十節に分けて詳述されている。しかし各節の配列順序が調査年度順でもなければ編年順でもなく、また挿図第一図の

岩木山麓遺跡分布図と比べて又ても、きわめて不統一なのは残念である。編年順が遺跡分布図の右廻りが左廻りに順序よく並べ、かつ各遺跡毎に番号を付し、遺跡分布図の右廻りが左廻りに順序よく並べ、かつ各遺跡名にもそれに対応する番号を付しておけば、たやすく対照できようになり、一そろ読みやすくなったらうと思う。しかしこれは、本章の内容が不正確だとか不十分だとかいうことにはならないので、この点は誤解しないでほしい。

ところで、先に各章・節毎の項目と筆者名を記入しておいたが、これを及て気がつくことは、特定の人やスル一ノの記述の及が異様に多いということである。藝雅を避けるためにいちいちのページ数は記入しなかったが、第四章の四六とページ中、田村誠一氏が全部で一三二ページ、今井富士雄・磯崎正彦両氏で一三〇ページ、村越源氏が四四ページで、これらの方々だけで実に三六六ページを占めているのが実情である。さらに村越氏は本書の編集責任者でもあって、その責任はきわめて重かつたものと推察される。

また氣になったのは、遺跡分布図の遺跡名と、第四章各節の遺跡名とに一致しない箇所があったことである。すなわち、遺跡分布図に記載されていて、第四章中に記載のないのが砥上沢と若松遺跡の二箇所、反対に第四章中に記載されいながら遺跡分布図に記載されていない

いものが、第六節の1・九十九森と2・マンサ森およびその附近、3の丸・黒森山、3のロ・枯木手、第十一節の2・景光院林・永平寺平の六箇所である。この点は、遺跡分布図を参照しながら第四章を読んで行く上で、かなり障害になった。

四

巻頭の編集言第二項に、「発掘した遺物は予想以上に多量であり、その整理は今日までもなお続けられている。したがって遺物によつては、すべてを報告出来なかつたところもある」と記されているように、第四章は中間報告的な性格を十分に持つている。しかし、第十六節の十腰内遺跡に、この報告は中間的な概報であると明記している以外は、整理が完了した本報告書なのか、あるいは中間報告的な概報なのか不明なものが多かつた。この區別は各遺跡毎に明記してほしかつた。遺物の出土量の多い遺跡の整理には、時として十年から二十年という長年月を要するものもあることは周知の事実である。しかし昭和三十六年の発掘調査終了からでも既に十余年たつた今日、この報告書出版当時には中間的な概報よりも書けなかつた遺跡でも、本報告書を公表できる状態になつてゐるものが多いであらう。

縄文式文化期の早期さのぞく前・中・後・晩の各期から、土師・須恵を含む歴史時代に及び、竪穴や古墳・配

石遺構・宮址等を抱えた岩木山麓の各遺跡は、まことに貴重なものであつたが、発掘調査そのものが既に遺石の破壊をも伴なうものであり、また開墾によつて失なわれたものも多いため、こうした点からも本書編集時には中間的な概報より書けなかつた遺跡については、整理が完了し次第、本報告の公表を期待するものである。第四章各節ごとの批評は一切しなかつたが、これは各遺跡毎の本報告が公刊され次第、改めて執筆したいからに外ならない。

またこの報告書は、学術的にはきわめて高度であり貴重なものであるが、それなりに全篇を精読するにはかなりの専門的知識と、根拠とが必要である。恐から一旦予約しておきながら、現物を見て購入を取消した人があつたのもこのことである。一般的に岩木山麓の遺跡からはどのようなものが出土したのか、ということを知りたい人々のためには弘前市立考古館があつて、そこへ行けば出土品の一部が展示されている筈であるが、各遺跡毎の出土品写真集といった種類の出版物も必要である。それには写真と挿図以外は、きわめて簡易な説明を載せる程度にすれば、一般の人々に親しみ易い郷土考古等の入門書にもなるのではあるまいか。

最後に、本書に編年表が付されていなのが残念であつた。三十を越す岩木山麓の各遺跡が、考古学上の何時代に属するかは、第五章の総括で斎藤志先生が部分的に

触れておられるが、これだけでは十分とはいえず、やはり編年表の必要性はあると思う。もちろん、編年表の作成は容易な仕事ではないが、せめて執筆でもよいから示してほしかつた。そろすれば本書の価値はより一層高つたであらう。

(昭和四十三年九月・岩木山刊行会発行・非売品)